

08

おりたくなるまち大阪玄関口

新今宮駅は関西一円の交通結節点。「降りたくなる」まちづくりから「居りたくなる」まちに

2017 年9月末に発表された「世界渡航先ランキング」(マスターカード)では大阪が1位。住みたい都市世界ランキングでも大阪が3位に入ったようですね。新世界周辺は、インバウンドによる外国人旅行者が年々増加し、駅周辺の宿所関係施設も約50万泊/年のバックパッカー達が訪れています。また2019年にG20の大阪開催が決定し「万博誘致」も佳境に入っているようです。その他、駅北側には星野リゾートホテルが営業、南海電鉄のなんば以南の開発、そして地下鉄なにわ筋線開通も決定しました。

しかし現段階では、地域とのつながりがないまちづくりが進められています。調査でも、外国人観光客増加には良い悪いの2極傾向があり、民泊増加、外部資本の影響、にぎわいについて悪化傾向にあると感じています。また駅北側エリアのみ開発が進むことで、結果として観光やにぎわいの「マイナス環境」を受け止めざるを得ない可能性も懸念されています(地域文脈なき民間開発によるジェントリフィケーションも懸念されます)。

駅前活性化部会では、「あいりん総合センター」の跡地に、新しい労働機能を持った施設のイメージが共有され次第、駅前地域活性化に向けたイメージを膨らませようと考えていますが、萩之茶屋小学校跡地が西成特区における重要な空間として積極的に活用することを容認した一方、駅と地域のアクセス確保をはじめ、町会や商店街が強く望む「地域の活性化や降りたくなるまちづくり」が重要テーマになっています。

現段階では、**07** だという社会包摂力と地の利を活かしたダブルエンジンを関係づけながら「降りたくなるまち」の交流から「居りたくなるまち」への展望が期待されます。思えばこのまちは、旅人を受け止めてきたまちですが、街に訪れ、つながり、いつしか暮らしがはじまり、定住でき、いつでも出入り自由な懐の深いまちづくりが重要であると考えています。

滞留から定住の間には人とまちの緩やかな関係があります。**06** にもあげましたが、いわば、滞留・滞在・暫住・定住というような段階があり、このグラデーションのなかには、暫住・定住の間を埋めるまちづくりが重要であるとともに、隣接区とのつながりや大阪の将来ビジョンや社会の動きとも連動した戦略が必要です。

また、具体的ににぎわいづくりの取組みとしては、地域の低未利用な敷地や建物(商店街)などの社会資源を暫定活用した「屋台村構想」などは特区構想をトライアル&エラーによって見える化しやすいプロジェクトであると考えます。運営主体づくりと商店街の活性化、子どもや若者の活動拠点(サテライト教室)など**01**や**07・08・09・10**のプロジェクトと連動することで、相乗効果も生まれると考えます。

大阪市イベント得区 芦原橋アップマーケット (大阪市浪速区)

芦原橋地域再生推進協議会が一社法人リイドを設立し、地域も連携。当初 55 店舗から始まり、現在では 110 店舗を超え、今後は、隣接する高架下の店舗を活用した日常の賑わいづくりを検討しているところです。このチャレンジによって、周辺の建物もリノベーションされて周辺の町をはじめ、なんば駅前のマーケットにつながりました。



<http://reedjp.org/up/>

京都市立芸術大学を核とした崇仁エリアマネジメント協議会（屋台村：崇仁新町）



@sujinshinmachi

京都市の低未利用地(約 500 m)を暫定利用(2.5 年)とした地域貢献型の屋台村プロジェクト。京都駅東側の好立地にありながら行政の低未利用地が広がり、住民の単身高齢化が進む地域再生を目指すまちづくりとして実施しています。とくに京芸大の移転を契機に、地域 5 学区がエリアマネジメント協議会を設立し、本事業の為にまちづくり会社も設立。芸大生と多様な主体がコラボする具体的な場として活用されています。京都の有名店だけでなく、地域のチャレンジショップも元気で、最大 3 万人/月が訪れています。

この町は、訪れる人や、
町での出会いで育っていきます。
まずはぶらりと町内を巡りましょう。
ぐるりと巡ったら、直感でお店を選びましょう。
好きなテーブルに座って、お酒や食事を楽しみましょう。
そのうち、他のお店も気になる頃です。
別のお店で気になる食べ物やオーダーしましょう。
隣の席の人と分け合いっこしてもいいかもしれません。
新しい出会いがあれば、自己紹介。
岩手県新町に遊びに来るときに 再会できるかもしれません。



09

「いまはないもの」が
生まれるまち

フォーマルとインフォーマルの間を埋めてきたまち

このまちでは、あまりにも深刻な問題が多くある中で、行政施策では対応できない状況が続いてきました。しかし、きわめて多様な支援者やプレイヤーがこのまちで繰り広げてきた仕組みは、今の制度にはないインフォーマルな仕組みとして重要な役割を果たしてきたといえます。

とくに就労や福祉の分野では、現場での緊急対応が求められることも多く、個人的ネットワークを駆使して個別事案に対応してきた（せざるを得なかった）ともいえます。今後は、個別に頼らざるを得なかった「職人的システム」をこのまちのケアの仕組みとして **07** のサービスハブと連動しながら、緩やかで柔軟な体制づくりが必要です。

またハウジングにおいても、2000 年以降、簡易宿所の一部がサポータティブハウスに転換したことで、困難の多い人々（金銭管理問題やアルコール依存症問題を抱えたりして、通常の施設なら野宿を繰り返すことになる人々）をささえる仕組みがインフォーマルに出来上がりました。これらの既存制度にはない、このまちでしか始められなかった取り組みであり、そこから一般地域でも、今そこにある住居資源を活用した支援付き住宅や居場所として活用する発想と実践が広がってきた 15 年間だったといえます。

その他、このまちには空間利用に特徴があります。それは、道路や公園、施設共用部や外部空間の占有という形で現れます。とくにその一時的占有は、利用者にとって「居場所」であり、パブリックとプライベートの間を埋めたものでもあります。このとき、**05** で検討されているような暫定利用や使い分けのように、地域が管理運営システムを行政から権限移譲するなどを含めて地域資源のネットワークを用いて柔軟に対応することで、インフォーマルがもつ可能性を享受できるといえ、そのための行政支援のありかたが求められます。ただし、フォーマルな部分をきちんと管理運営しながらも、この事業によって零れ落ちていく人がないように、このまちがもっていた「制度の間を埋める」取組みを今後も生かし、ここから市域や全国に広がるような展開を目指したいものです。

サポータティブハウス



(社福) 今池平和寮

